

平成22年度 小松市立高等学校 学校評価最終報告

重点事項	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	現段階での分析
1 各学年に応じたキャリア教育を通して生徒の自己実現を目指す。	1 生徒の学力向上や進路実現に向けて、より適切な指導・助言ができるよう個人面談・保護者懇談などを通じ、生徒・保護者へのコミュニケーションを充実させる。	個人面談の回数が A 5回以上 B 4回 C 3回 D 3回以下	A	1・2年・・・年度当初の面談計画に添って、実施することができた。計画以外においても生徒に効果的な指導助言を行うことができた。また、生徒とのコミュニケーションの充実をはかることができた。 3年・・・進路実現に向けて、模試結果や定期考査の結果を踏まえ、適切な助言を与えることができたとともに、学習のあるべき方向性を示し、学習意欲の喚起を図ることができた。また、三者面談を通じ、保護者との間で志望状況の確認と相互理解をはかることができた。
	2 1、2年次に実施したキャリア教育の行事や総合的な学習の時間のテーマ研究、小論文との連携において、3年生までに自らの進路を決定する。	3年生になるまでに自分の進路先が A 決定した B だいたい決定した C 考え中である D まったく決まっていない	B	進路課・・・「キャリア教育」として各行事を段階的に実施し、総合的な学習の時間も計画通り行った。特に今年度は、中高連携としてディベートの発表会を行ない生徒の進路探索能力の育成にも努めた。ただ、年間を通して進路意識の向上を維持することは難しいという事も痛感した。来年度は総合的な学習の時間を今年度以上により効果的に活用していきたい。1年・・・多くの生徒が類型(文系・理系)選択及び進学か就職か、進学の場合、校種(大学か短大か専門学校)選択にとどまっており、具体的な進路先まで考えが及んでいない。2年・・・最終科目登録までに進路について方向性が定まっていたが、1/3ぐらいの生徒は決めかねていた。
	3 芸術コースの教育内容について理解を広めるため、対外的主要5行事に多くの参加者、集客を得ることを目指す。	努力指標を上回った行事が A 5つすべて B 3つ C 2つ D 1以下	C	オープンキャンパス・・・目標達成 体験入学・・・目標達成 芸術祭・・・目標未達成 ミュージックコンサート・・・目標未達成 卒業制作展・・・目標未達成 設定した目標数値が適正ではなかったと考える。 行事の内容を中学生などの参加を得やすい内容に検討したい。
	4 PTAと連携して、キャリア教育の充実をはかる。	参加生徒が A 300名以上 B 250～299名 C 200～249名 D 200名未満	D	「社会人仕事パネルディスカッション」で参加生徒数は123名と目標にまったく達しなかった。しかし、内容は3年目にしてかなり充実し、参加した生徒達の満足度も高い。日程的に10月は行事が多く、複数の部活動の大会等の影響もあり参加人数が少なかった。来年度は日程を熟慮し、300名を目指したい。
2 生徒の基礎学力の定着、家庭学習の習慣の確立ならびに部活動との両立を目指す。	1 補習や学習合宿、家庭学習などにおいて進路実現に効果的である取組を実施する。	満足する進路先に決まったと答えた人数が全体の A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C	生徒の進路実現に向けて行なってきている土ゼミや補習あるいは勉強合宿等のやり方や内容を反省し、改善していくべきところは思い切って見直ししていく必要もある。また、m100mを掲げて生徒たちに家庭学習の重要性を指導してきてはいるものの、生徒個人の学習の仕方については追求していない。今年度の3年生は推薦入試からセンター試験に向けての切り替えがうまくいかなかった生徒が多かった。また、推薦入試やセンター利用の私大入試を比較的安易に考える傾向が強いとも感じた。いずれにしても早期の基礎力強化が急務である。
	2 家庭学習の習慣を確立し、学習時間を確保する。	目標時間に達成している生徒が 3年生 A 80%以上、B 60%以上、C 50%以上、D 50%未満 2年生 A 60%以上、B 50%以上、C 40%以上、D 40%未満 1年生 A 50%以上、B 40%以上、C 30%以上、D 30%未満	B	・1年次より学習時間調査を行い、家庭学習の習慣はかなり定着してはいるが、効果的な学習であったとは言い切れない。 ・与えられた課題については、真面目に取り組んでいるが、自己に応じた学習をするまでには至っていないので、個別面談をとおして、家庭学習の内容を修正させた。
	3 校内研究授業や授業見学を行い教師の授業改善に努める。	1年間を通じ、授業見学回数が、 A 5回以上 B 4回 C 3回 D 3回未満	A	授業参観ウィークを設定し、各教科の枠にとらわれず、授業参観を行った。また、複数の教科において、校外の研修にも参加した。校内の参観の際には、授業参観シートを有効活用し、教員相互で助言しあえるムードづくりに努めるとともに、互いに授業参観が特別なものでなく、日常的なものになるよう取り組んだ。
	4 部活動・課外活動と学習活動の両立を目指し、進路実現を図る。	部活動との両立ができたと答えた生徒が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	D	学校評価アンケートの結果では「私は部活動と勉強の両立ができている」の項目にたいして「あてはまる」12.0%「ややあてはまる」37.9%、両方合わせても49.9%で、両立できていると思っている生徒がかなり少ないことがわかった。特に2年は「あてはまる」7.3%と低い。現段階ではDであり、「部顧問会議」等で検討していきたい。

3	生徒の国際交流への支援体制を整え、積極的な参加を促す。	1 修学旅行の事前指導	修学旅行の事前指導が意義あるものであると判断した生徒が A 80%以上 B 70%以上 C 50%以上 D 50%未満	C	修学旅行の時期が6月になり、事前指導の回数が大幅に減少した。それに対応する取り組みが遅れてしまい、十分な指導時間を確保できなかった。1年の学年末考査終了後から計画して取り組むべきだった。
		2 英語によるコミュニケーション能力を高め、積極的に国際交流に参加する姿勢を身に付ける。	英語検定で準2級以上の資格を取得した生徒が A 70人以上 B 60人以上 C 50人以上 D 50人未満	C	朝学習に系統的にリスニングプログラムを組み込むなど、英検受験に向けての啓発を推進した。アクションプロジェクトの重要な支柱の1つである国際交流の推進のためにも、外国語に対する学習意欲をさらに高め、受験者および合格者の増加に取り組むたい。 2級合格者 6名/41名 準2級合格者 52名/173名
4	生徒の基本的な生活習慣の確立と社会的規範意識の向上を図る。	1 登校指導、ホームルーム等で始業時間の大切さを理解させ、遅刻をなくしベル着を定着させる。	1日の平均遅刻人数が A 3人以下 B 5人以下 C 7人以下 D 7人以上	C	2月10日現在の遅刻カードのデータでは、1日平均遅刻数が4.1人である。1学期は2.9人だったが、2学期は4.8人と増加している。また、不登校傾向の生徒の遅刻カードが一部提出されていない場合もあり、実数はさらに多いと考えられる。特定のルーズな生徒に対する個別指導の強化が必要である。
		2 交通安全講話や登校指導で交通ルールを理解させ、登下校時の安全を図る。	十分自覚して行動している生徒が、 A 90% B 85% C 80% D 80%以下	D	学校評価アンケートの結果では「交通ルールを自覚して行動している」の項目に対して、「あてはまる」28.9%「ややあてはまる」を加えても79.0%であった。実際の生徒の様子をみても、「二人乗り・携帯使用・傘差し」等も見られ、今後の指導の強化が必要である。今後、下校指導も考えていきたい。
		3 登校指導等により、挨拶の励行を推進する。	自らすすんで挨拶ができると答えた生徒が A 90%以上 B 70%以上 C 50%以上 D 50%未満	C	学校評価アンケートの結果では「自らすすんで挨拶している」の項目に対して、「あてはまる」29.1%「ややあてはまる」を加えると73.7%であった。毎朝の登校指導を見ても、教師から声をかけないと挨拶しない生徒や声が小さい生徒も見られるので現状と一致している。2学期以降生徒会全体でも挨拶運動を実施しているが、今後も継続して指導していく。
5	環境学習にも関心をもち、知性豊かで心身ともにたくましい生徒の育成を目指す。	1 ゴミを出さない、持ち込まない意識を向上させごみの排出量を減少させる。	昨年度の排出量より A 10%減 B 5%減 C 増減なし D 増	C	前期は昨年より約10%減少していたが、11月・12月に昨年より増加し全体では2%減にとどまった。持ち込まない、持ち帰るをスローガンに2年目に入り、マンネリ化が少し見られてきたように感ずる。
		2 多くの生徒が読書を身近なものとして捉えられるように興味・関心を持てる企画を実施する。	図書貸出人数の増加が A 40人以上 B 30人以上 C 20人以上 D 20人以下	D	前年度と比較した結果、7人減であった。前年度に比べると、特に1年生の利用者が少なく、その結果貸出人数も伸び悩む結果となった。今年度より図書館システムが導入されたが、貸出、返却、資料検索が容易に行えるようになったことを知る生徒も少ないので、図書館をより身近に感じてもらえるような行事や広報活動を行い、来年度は貸出人数、貸出冊数の増加を図りたい。
		3 体幹を鍛え、バランス力を養うため、授業で倒立を行う時間を設ける。	目標を達成している生徒が 男子 1年 2年 3年 A 70% 90% 85%以上 B 65% 85% 80%以上 C 60% 80% 75%以上 D 60% 80% 75%未満 女子 1年 2年 3年 A 75% 35% 40%以上 B 70% 30% 35%以上 C 65% 25% 30%以上 D 65% 25% 30%未満	A	達成できた生徒が 男子 1年 2年 3年 女子 1年 2年 3年 88% 93% 92% 95% 53% 40% 各学年できる生徒ができない生徒の補助をしながらよく頑張っていた。また、できる生徒が増えていく中、やればできるようになるんだという雰囲気生まれ、できないからやらない、怖いからやらないという生徒が減ってきた。そのため各学年目標数値よりもできる生徒が増えたように思う。